

令和4年度 学校評価（星城高等学校）

建学の精神	彼我一体：報謝の至誠 文化の創造 世界観の確立		
教育目標	“感謝のできる”実践力に富んだ逞しい人間の育成		
学校経営方針	<ul style="list-style-type: none"> ・建学の精神の具現化を目指し、「感謝のできる」実践力に富んだ逞しい人間の育成」に取り組む。その中で「礼節」「進学」「スポーツ」「国際交流」「英語」に重点を置き確実に進展させる。 ・今年度から始まる明德コースについて学校全体で取り組み充実を図る。県内の全中学校・中学3年生に対し、広報の充実、周知の徹底を図る。 ・仰星コース、特進コースについては、学力の向上、進路実績の充実を図る。 ・新入生500名以上を確保する。 		
重点目標	<p>I 礼 節：教職員が率先して行動することで、生徒の「礼節・感謝」の徹底を図る。</p> <p>II 進 学：進路指導を充実し、昨年度を上回る進路実績を目指す。</p> <p>III スポーツ：全国大会出場生徒数100名を目指す。</p> <p>IV 国際交流：新たな交流国を探すと共に現交流国と親交を深める。</p> <p>V 英 語：各コースにおいて検定等の目標を明確にして、英語の星城を一步すすめる。</p> <p>VI 明德コース：学校全体で取り組むと共に広報の徹底を図る。</p>		
重点目標	評価項目	担当	具体的方策≪数値目標≫ 実施状況（◎実施したこと *今後の改善点）
I	コンプライアンスの徹底 生徒主体の活動	第3学年	<p>◎学年集会（学年主任講話等）を通して、学校のルールや社会的規範を遵守した行動をとることの大切さを理解させる。</p> <p>◎星城高校の生徒として一人ひとりが自ら判断・行動できるような人物に成長させるため、級長の中から各コースリーダー（仰星・特進・アスト・理・文コース）各1名を選出し、学年行事、集会時の整列指示・身だしなみ等の確認を行うことで、生徒の主体性を高める。</p> <p>◎級長・副級長会議を開催し、上記内容が円滑に進行する方法について話し合いを行なうとともに、教員から助言・指導する。</p> <p>◎STの司会を生徒が行うことで主体性を養う。</p> <p>≪学年集会・式典において、各コースリーダーの指示で、15クラス中12クラス以上が、5分前に集合完了する。≫</p>
I	テスト実施の在り方	教務部	<p>◎定期テストのルールを遵守してテストに臨ませるため、ホームルーム等で生徒に指導する。</p> <p>◎テスト毎に、「テストに関する注意事項等」をメール等で配信して、不正行為が起きないようにする。（教員、生徒、保護者に対して）</p> <p>≪テスト時のトラブルゼロ≫</p>
I	生活習慣の確立	生徒指導部	<p>◎生徒指導部の登校時の挨拶指導において、挨拶と共に服装の乱れがないかを生徒自身で確認するように声かけをする。</p> <p>◎欠席日数を減らすために、担任による個別面談を複数回実施し、生活習慣の確認や抱えている悩みなどの早期把握に努める。そして、悩み等の相談に応じることで安定した高校生活が送れるようにする。</p> <p>≪年間出席率が90%以上≫</p>
I	交通ルールの遵守とマナーの向上	生徒指導部	<p>◎交通講話等を利用して交通ルール遵守を喚起していく。あわせて、歩行通学者に対しても交通安全とマナーについてのチラシを配信するなどして交通ルール遵守を喚起していく。自転車通学者には、危険運転やマナーについての具体的な事例を示して、交通安全に努めるように働きかける。</p> <p>◎全国交通安全運動期間や本校自転車通学指導週間では、注意事項をClassi配信するなどして安全利用五則の徹底を図る。</p> <p>◎各学期の始めに、生徒指導部から建学の精神に触れ、交通マナーについての啓発していく。</p> <p>≪自転車と車の接触事故 年間10件未満≫</p>
I	健全な心身の育成	保健部	<p>◎各学年で実施する保健部講話（教育相談講話）の内容を充実させる。</p> <p>第1学年では、性的少数者（LGBT）について深く理解させて、周囲に対象者がいることを前提にした発言や行動を考えさせる。</p> <p>第2学年では、異性との関係にどのように向き合えばよいかを理解し、興味本位ではない正しい性の知識と行動を身につけ、「いのち」について考えさせる。</p> <p>第3学年では、人と人との関わりあいの中で、互いを大切にす気持ちと相手を尊重する心を考えさせる。</p> <p>◎保健部便り（教育相談便り）『はーとん』を発行し、生徒の心身の健康を啓発する。</p> <p>≪各講話終了後のアンケート調査で、生徒の理解度が95%以上≫</p>
I	地域住民との協働	仰星特進コース 探究部	<p>◎「花溢れる街づくりプロジェクト」を継続するための新しい取り組みを生徒とともに模索し、実践する。（今年度は1単位、平日にて実施）</p> <p>◎地域住民との協働を通して、協力していただける地域の方や自分がおかれた環境に対して感謝し、他の人を敬う態度を育成する。</p> <p>≪「花溢れる街づくりプロジェクト」への地域住民参加者 A：60人以上、B：50人以上、C：40人以上、D：40人未満≫</p>
			<p>◎「テストに関する注意事項等」について年度当初に担任を通して内容の伝達（教室掲示）を行った。定期テストごとに、生徒・保護者に対してテスト期間、テストの注意事項、臨み方等をClassiで配信した。教員に対しても「テストに関する注意事項等（テスト作成・テスト実施に関する注意事項含む）」を定期テストごとに配信し、テストが厳正に実施できるようにした。</p> <p>*テストごとに教務部から配信する内容が多いこと等で、配信内容を十分に確認できていない点が見られた。来年度は、シンプルな形で伝達できるように工夫したい。</p>
			<p>◎登校時の校門指導などで、挨拶や服装について、生徒たちに促し、概ね整っていた。</p> <p>◎各クラス担任が、個別面談などを通して、生徒の悩みや問題に対応し、安定した高校生活を送れるように指導した。</p> <p>*欠席や遅刻については、担任の指導があっても少なからず傾向もあったので、生徒指導部での連携を検討する。</p>
			<p>◎交通マナーについて、自転車通学者だけではなく、全生徒にClassiで注意喚起をした。（チラシという形態ではなく、スライドとして配信した。）交通ルールの遵守については、事故が起こった時や外部からの苦情等があった時に、教員への一斉メールなどで具体的な事例を示して交通安全指導を行うように呼びかけた。</p> <p>*建学の精神に対する意識をあらためて伝達していけるような体制を検討する。</p>
			<p>◎各学年でテーマに沿った保健部講話（教育相談講話）を1学期間に実施した。具体的な事例を講師の先生にあげていただいたことから、生徒はよく理解し、思考の深まりにつながった。</p> <p>◎保健部便り（教育相談便り）『はーとん』を3回発行し、保護者に教育相談組織の周知を図り、生徒へは心身の健康を啓発することができた。</p> <p>*保健部講話は、事前に講師の先生との打ち合わせを行うことにより、充実した講話になった。今後は、講話の内容を1学期末発行の『はーとん』に記載するなどして、保護者への情報共有を図りたい。</p>
			<p>◎「花溢れる街づくりプロジェクト」では、104名の地域住民と協働することができた。また、事後の維持管理にも力を注ぐことができた。</p> <p>◎新しい取り組みとして、地域住民との交流会を生徒自ら企画実施した。14の協働団体のうち11の協働団体との交流会を実施することができた。一方、コロナ禍のため、一堂に集まることへの危惧があり、実施できない班もあった。</p> <p>*「花溢れる街づくりプロジェクト」当日の天気によっては、実施が困難である。予備日を検討する必要がある。</p>

重点目標	評価項目	担当	具体的方策《数値目標》	実施状況 (◎実施したこと *今後の改善点)
II	各種検定受検の後押し(明德)	第1学年	○進路選択の幅を広げるために、担任の協力を得て、学年検定係から各種検定への積極的な挑戦を促す。 《漢字検定・数学検定・英語検定の受検者数各100名以上》	◎担任や教科担当者からの声掛け、進路獲得におけるメリットなどの説明を実施したが、学年としての大体的なアプローチに発展させられなかった。 *声掛けの方法や検定が進路獲得につながる客観的根拠となる資料の提示を考えたい。
II	学習習慣の確立(仰特アス)	第1学年	○定期的な個人面談(各学期2回以上)を実施して、一般入試に耐えうる学力の土台構築のために学習習慣の確立と改善を図り、スタディーサポート3教科GTZでBゾーン以上を目指す。 《3教科GTZ Bゾーン以上の生徒35%以上》	◎定期的な面談の実施と英単語・古文単語コンクールの複数回実施したが、単語コンクールを生徒のモチベーションアップへと直結させることはできなかった。 *生徒へのアプローチ方法を検討し、改善したい。
II	小論文講座の受講(文・理)	第2学年	○入試を意識した準備学年として、小論文講座(基礎編)の受講を推進し、文章作成能力の向上を目指す。 《小論文講座(基礎編)受講者数100名以上》	◎総合型・学校推薦型入学選抜の実態を、担任を中心として生徒に説明し、文章作成能力向上の必要性について指導した。その結果、198名が受講するに至った。 *今後は、受験指導として、実際に入試科目として小論文を選択する生徒に対し、次年度の実践編の受講を勧める。
II	模試GTZ(仰特アス)	第2学年	○国公立大学進学を第1希望と考えることを前提とした進路指導を進める。その中で、平素の授業を大切に学習を勧めるとともに、ベネッセ総合学力テストにおけるGTZの変化を常に意識させ、進路実現に向けた学力向上に努めよう指導する。 《ベネッセ総合学力テスト GTZ3科総合 B1以上の生徒50%》	◎平素の授業を大切に、学力向上を目指し指導した。また、夏期の特別進学講座などでは、模試を念頭において演習問題に取り組みさせた。 *進路への意識の高まり、自己の現在の力量と志望校との差を認識し、必要な学力を把握する指導とともに、入試本番に向けた授業内容へと授業自体を改善する。
II	基礎学力の充実	第3学年	○朝の10分間学習を意欲的に取り組む指導を行うことで基礎学力の充実に図る。 ○スタディーサポートの事前シート・振り返りシートを活用し、生徒自らが学習習慣等を見なおすことでGTZの向上を図る。 ○スタディーサポート等のデータを基に面談を行い、進学・就職目標を達成できるように家庭学習(予習・復習)時間を増やすように指導を行う。 《仰星: GTZ B2以上50%、特進・アステ: GTZ B以上50%、普通: GTZ Dゾーン50%以下》	◎朝の10分間学習を計画通りに実施することができた。 ◎スタディーサポート実施後、次の模試に向けてや進路目標に向けての面談を実施することができた。 *普通コースGTZの目標値Dゾーン50%以下を達成できなかった。よって、今後は事前学習の指導方法を再考したい。
II	進路獲得の実現	第3学年	○仰星・特進・アステコースは、国公立大学受験を挑戦する気持ちを持ち続けることができるように、HRや面談、集会等を通して生徒に促していく。 《国公立大学 出願者数100名以上、合格者数30名以上を目指す。》 ○理・文コースは、小論文講座(集中講座含む)、就職対策講座、志望理由書き方講座受講を促し、総合型選抜・学校推薦型選抜を中心に進路に向けての活動をサポートする。 《講座受講者100名以上》	◎国公立大学受験に向けて、意識を高揚することができた。出願者数72名であった。(合格者数は、3月下旬に確定する。) ◎小論文講座143名、志望理由書き方講座67名、就職講座27名、小論文夏期講座9名受講し、合計246名の受講があった。 *面談等による進路指導と授業以外の講座等を受講する効果についての指導を今後も継続する。
II	業務改善	教務部	○日常の業務内容を整理するために、1つ1つの業務の見直しを進める。特に電子化の推進に重きを置き、指導要録の電子化を最重要課題とする。スムーズに導入できるように、作成に関する注意事項を周知徹底し、場合によっては講習会などを行う。 ○新学習指導要領の変更に伴う観点別評価について、よりよいものになるように改善をしていく。 《業務改善の実施事案 5つ》	◎指導要録(指導の記録)の電子化に向けて、入力時に関する注意事項の作成を行った。特別活動の記載についても基準を設定し、適切な評価ができるようにした。1年生の学年会で2回ほど、e-教務への入力方法(指導要録の内容等)に関する説明会を実施した。 ◎観点別評価については、部会で現状の問題点、課題等をあげた。また、今後改善に向けて、特に観点別評価の内訳や主体的に学習に取り組む態度(意欲点)の評価方法について検討した。 *主体的に学習に取り組む態度(意欲点)の評価の在り方については、具体案を示すことができていないので、次年度に向けて具体案を検討する。また、指導要録等の作成において外部企業が作成したアプリ等を利用することで、更なる担任業務の改善が進むように検討をしたい。
II	学習習慣の定着と進路目標の早期設定	学習指導部	○学習習慣の定着と学習意欲の継続のため、スタディーサポート事前シート・活用BOOKを使用して到達目標を設定し、学習計画を立案させる。また、結果を基にした事後の振り返りシートを使用して、自己の学力状況を把握させ、次回に繋げる。 早い段階で各自の得意・不得意科目や学習時間・学習スタイルを把握・振り返らせ、入試を意識した計画を立案させる。 《各学年GTZ Dゾーン生徒の割合を20%以下にする。(S: 10% A: 20% B: 30% C: 20%を目標とする)》 ○「GTZ」を一つの指針として学習を進められるよう、必要な基礎学力の定着状況について、各自が実感できるような指導を行う。 また、スタディーサポートの事前・事後指導を学校共通の動きとして行うために、学習指導部だけではなく各担任・教科担当からも実力テスト・各種模試受験の意義や学習の取り組み方、目標設定の方法や帳票の見方・活用方法などについて細かい指導ができるように教員側のスキルアップを図る。 《教員のベネッセハイスクールオンラインへの登録数が60%以上》	◎スタディーサポートの事前指導・事後指導に際し、特に結果が記載されている『個人診断レポート』の基本的な見方・扱い方、帳票から面談のポイントをピックアップする方法とハイスクールオンラインの活用方法についてベネッセコーポレーションに依頼をして教員対象の研修会を開催した。研修会の直後は面談が活発におこなわれているシーンも見られた。 ハイスクールオンラインの教員個人登録数であるが、研修会直後は増加したものの2学期以降の登録数が伸び悩んだ。 生徒への意欲向上のため、長期休業中の「ClassiWebテスト・学習動画」を学習スケジュールとともに配信した。 *生徒の取り組み意識を変化させるために、各回データリソース後にGTZ各ゾーンごと、生徒向けの講習や指導を実施したい。

重点目標	評価項目	担当	具体的方策《数値目標》	実施状況 (◎実施したこと *今後の改善点)
II	学習習慣の定着と進路目標の早期設定・進学実績の向上(1年)	進路指導部	<p>○1年生：英検、漢検、教検に積極的に挑戦させる。そのため、コース別集会において進路における検定の重要性をそれぞれのコースに対して伝えながらクラス担任による個別面談に繋げていく。進研総合学力テスト11月結果データをまとめて保護者会の資料を作成し、コース選択の資料に活用して学習意欲向上に繋げる。</p> <p>《英検受験150名、漢検受験100名、教検受験50名》</p> <p>仰星コース：学習習慣の定着と学習意欲の継続のため、スタディーサポート事前シート・活用BOOKを使用して到達目標を設定し、学習計画を立案させる。また、結果を基にした事後の振り返りシートを使用して、自己の学力状況を把握させ、第2回に繋げる。</p> <p>《担任による生徒面談を年間4回以上実施する。GTZ：S→20% A→60% B→20%(1学年50名中)》</p> <p>特進・アスコース：コース別集会、個別面談を複数回実施し進路目標設定の動機付けを行い、国公立大学・難関私大を視野に入れた進学指導を施す。進学通信などを配信し地方国公立にも目を向けさせる。</p> <p>《ベネッセ総合学力テスト11月英国数3教科総合偏差値50以上が30名以上》</p> <p>明德コース：基礎学力の定着とともに、検定への積極的な挑戦を後押しする。</p> <p>《進級時のGTZのDゾーンを60%以下》</p>	<p>◎学年や教科の協力を得て検定受験を勧めたり、模試や実力テストの事前学習等を行ったところ、英検第3回まで277名、漢検第2回まで60名、教検第2回まで11名であった。</p> <p>*漢検・教検においては第2回までのデータに基づく数値であるが英検に比べて成果が伸び悩んでいる。講座等との連携を図ることも考えていく必要がある。仰星コースのGTZは、上位層の割合低下を表している。旧帝大クラスの生徒も10%以上いる中でBゾーンが過半数以上を占める状況は、進路指導に相当の指導力が求められる。特進アスコースに関してはクラス数・生徒数が多い中、目標である偏差値50以上・36名であった。進路指導において担任団の意見をしっかりと受け止め3年生の受験方針を定めていきたい。明德コースのDゾーンの比率が超過してしまったことに関しては、今後探究部とも連携を図り進路獲得のシナリオを作っていきたい。</p>
II	学習習慣の定着と進路目標の早期設定・進学実績の向上(2年)	進路指導部	<p>○2年生：進研総合学力テスト11月結果データをまとめて保護者会の資料を作成し、進路選択の資料に活用して学力向上に繋げる。各種検定に積極的に挑戦させる。</p> <p>《英検受験150名、漢検受験200名、教検受験50名》</p> <p>仰星コース：早い段階で各自の得意・不得意科目や学習時間・学習スタイルを把握・振り返らせ、入試を意識した計画を立案させる。</p> <p>《ベネッセ総合学力テスト11月において、国英数総合偏差値50以上が30名。(2学年45名中)》</p> <p>特進・アスコース：早い段階で各自の得意・不得意科目や学習時間・学習スタイルを把握・振り返らせ、入試を意識した計画を立案させる。</p> <p>《ベネッセ総合学力テスト11月において、英国数、英国社、英数理いずれかの3教科総合偏差値50以上が30名以上》</p> <p>理・文コース：小論文講座を積極的に受講させると共に各種検定にも挑戦させる。</p> <p>《小論文講座受講者250名》</p>	<p>◎学年や教科と連携しながら、検定受験を勧めたところ、英検第3回まで209名、漢検第2回まで76名、教検第2回まで8名であった。</p> <p>*検定に関して、英検の受験者数は安定している。推薦内規に定められる3種類の検定でライティング講座の存在が大きい。また、英語に対する意識の高さも影響していると考えられる。</p> <p>*漢検・教検に関しても検定に向かわせる仕組みや流れを工夫していきたい。</p> <p>*ベネッセ模試において仰アス3コースの目標値に僅かに及ばなかったことは、母集団の少なさが要因として考えられるが、そんな中で教員団は、必死に指導した。</p> <p>*小論文講座は特進が2号館に移ったこともあって、その設定値を変更する必要がある。来年度の目標値設定の参考にしたい。</p>
II	学習習慣の定着と進路目標の早期設定・進学実績の向上(3年)	進路指導部	<p>○3年生：スタディーサポート等のデータを基に面談を行い、進学・就職の目標を達成する。</p> <p>《仰星GTZ B2以上50%、特進・アスGTZ B2以上50%、理・文GTZ Dゾーン50%以下》</p> <p>仰星・特進・アスコース：学級担任による面談の回数・内容を充実させ、志望校合格に向けた「受験プラン」を早期に立てさせる。全員が共通テスト5教科型を受験し、国公立大学出願の可能性を広げる。</p> <p>《国公立大学出願数100名以上、国公立大学合格者30名》</p> <p>理・文コース：進研模試結果6月をもとに保護者会で目標設定をし、推薦基準となる9月の模試に向けた動機付けをしっかりとさせる。また、夏休み中の補習参加などを促し、生徒全員の学力向上に繋げていく。小論文講座を充実させ、総合型選抜・学校推薦型選抜での進路獲得に繋げる。内部進学者増を目指し、進路相談会などを企画・実施する。</p> <p>《内部進学者40名、小論文講座・就職対策講座・志望理由書書き方講座受講100名以上、指定校推薦獲得50名、大学・短大合格者延べ150名》</p>	<p>◎担任が教科から模試の受験や大学受験についての指導を細かくしてもらったところ、共通テスト模試9月GTZは、仰星B2以上36%、特進・アスB2以上21%、理・文D以下87%であった。</p> <p>仰星文Ⅱコースを除くほぼ全員が共通テスト5教科型受験をした。国公立大学出願数は延べ131名(出願者数72名)であった。2月以降に試験があり目標の30名合格を達成する予定である。</p> <p>理・文コースは、内部進学者41名、講座受講者246名、指定校推薦獲得者62名、大学・短大合格者延べ167名と目標値をすべて達成することができた。</p> <p>*GTZの目標値に関しては、実態とかなりかけ離れている。来年度以降は状況に応じた設定を心がけたい。国公立大学出願数に関して、今年度は生徒数が多く現役で医学部合格する生徒も増加しているなかで学年全体に勢いが感じられた。核となる生徒の獲得が生徒募集において不可欠である。</p> <p>理・文コースに関して、今後は探究元年となる令和4年度入学生進路指導を視野に指定校推薦や総合型選抜入試の合格者数を伸ばしていきたい。</p>
III	強化部の入学生徒増加と人間性の向上指導	生徒指導部 部活動支援	<p>○「スポーツの星城」の推進を図るために、広報部及び各顧問との連携を強化して生徒募集の現状を把握して、問題の解決を図ることで強化部の入学生徒増を目指す。</p> <p>○日々の部活動指導を通じて、「本校が求める強化クラブ・スポーツ奨学生のあるべき姿」を生徒自身に考えさせ、具現化を目指すと共に、人間性と技術面の向上を図る。</p> <p>《部活動の生徒募集による入学者数110名確保》</p>	<p>◎「スポーツの星城」の推進を図るため、広報部及び各顧問と連携を強化し強化部の入学生徒増を目指して、募集委員会や広報・各顧問が協力し募集努力をしてくれた。強化部の入学の増加と特待生徒のあるべき姿を目指し、スポーツ推薦・奨学生で目標を達成できるように来年度入学の募集関係の顧問会議を広報部主導で実施した。</p> <p>*各部活動の技術面だけではなく、人間性を高め、奨学生としての自覚やプライドを持たせると共に自分の将来の進路目標等も持てるよう指導をしてもらっている。今後はさらにスポーツ推薦や奨学生としての自覚や目標を持たせ、リーダーシップの育成を図る方策を検討する。</p>
III	部活動運営の把握と管理	生徒指導部 部活動支援	<p>○各種大会日程や結果を教職員に向けて広報し、部活動の活躍を応援する体制作りに努める。</p> <p>○生徒が各部活動の大会応援に行くなど、全国大会出場に向けた環境作りと支援を行う。</p> <p>《応援する体制作りができた。》</p>	<p>◎県総体・東海大会・全国総体・選抜大会出場クラブ・日程・結果などをまとめ、教員や生徒に広報した。また、野球部の夏甲子園予選愛知県大会の応援企画を庶務と協力し実施した。</p> <p>*各部の各種大会結果を部活動支援の各部活動フォルダーに保存していただくように依頼したが、時間のかかる部活があるので、年度末に再度依頼する。</p>
III	部活動ガイドラインに則った部活動運営	生徒指導部 部活動支援	<p>○各クラブの活動計画に基づいて部活動の現状を把握し、運営・管理を徹底する。</p> <p>○「部活動指導ガイドライン」や「部活動に係る活動方針」に則った部活動の運営を徹底し、体罰等のない健全な部活動運営を行う。</p> <p>○部活動施設の設備の点検など安全管理を徹底し、事故発生防止に努める。</p> <p>《部活動における不祥事ゼロ》</p>	<p>◎5月当初に各部活動の年間各種大会予定表、部費や父母の会の有無などの調査を実施し、各部の現状把握を行った。</p> <p>5月に各部活動の施設の状況や要望等のアンケートを実施し、要望や改善箇所をまとめた。</p> <p>*第一グラウンドの土を削り整備をしたが、根本的に改善がされていない。第一グラウンド内マンホールの段差に土を入れ、段差を直したのは事故防止に繋がりが良かった。</p> <p>*部活動顧問(教員)の不祥事はなかった。今後も部活動指導ガイドラインに則った部活動の運営の徹底を図る。</p>

重点目標	評価項目	担当	具体的方策≪数値目標≫	実施状況 (◎実施したこと *今後の改善点)
IV	交流国と親交を深める	庶務・国際交流部	○現行のアメリカ、ブルガリア、オーストラリア、カナダ、パラオの交流校および各協会と密に連絡を取り交流を深める。本年度は、新型コロナ感染拡大状況や国際情勢に応じ、海外への渡航（交換留学や短期留学）を可能な範囲内で計画し、実施の方法を模索する。また、昨年度に引き続きオンライン交流を行い交流校・交流国との親睦を深める。 《R4年度の留学の計画が、上記5カ国で進んだ場合A、4カ国の場合B、3カ国未満の場合C》	◎各交流国・交流校へニューイヤーカードを送付した。また、パラオとの柔道交流を実施予定にしている。 ◎ブルガリアのガプロボ市とR5年に交換留学を行うための準備を行った。R5年4月の受け入れ、8月に派遣する計画を進めている。また、R6年3月にアメリカ、または、オーストラリア短期留学の再開に向け準備を進めている。 *コロナ禍ではあるが海外渡航も再開し始めているため、国際交流を再開するべく準備を進めていく。
IV	新たな交流国の開拓	庶務・国際交流部	○旅行者や協会などの協力を得ながら新たな交流国の開拓に努める。新型コロナウイルスの感染状況や国際情勢に応じて留学生の受け入れ（ホームステイなど）の実施に向けて努力する。 《新たな交流国や留学生の受け入れができた場合A、新たな交流企画が実現できた場合B、現状維持の場合C》	◎新たな交流校を開拓するために、3月に実施されるオーストラリアでの事業に参加する。 ◎新規にJDRACを仲介してスウェーデンから男子の留学生を1名受け入れた。 *JDRACやロータリークラブなどを介して、新規1年間留学生の受け入れを模索する。
VI	探究学習の充実	明德コース探究部	○明德コース第1学年の「総合的な探究の時間」において、「社会未来探究」のカリキュラムを開発し、実践する。 ○SDGsを通して社会課題を自分事として捉え、原因や解決策の検討などに協働して取り組む態度を育成する。 ≪ルーブリック4段階自己評価の集計 A:主体性と協働力の両項目でレベル4と3の生徒が半数以上 B:どちらかの項目でレベル4と3の生徒が半数以上 C:主体性と協働力の両項目でレベル2以上の生徒が半数以上 D:どちらかの項目でレベル2以上の生徒が半数以上≫	◎探究学習のカリキュラムを開発し、実行委員会で各担任と計画を共有して授業を実践した。 ◎SDGsを中心に様々な社会課題についての調べ学習やポスター発表などを実施することで、多くの生徒が主体的・協働的に探究学習に取り組んだ。 *探究学習の質を高めるために、社会課題について生徒がより深掘りするような実践方法を開発したい。
VI	明德コースの広報	広報部	○HPで明德コースの活動を知らせる。HPに探究の項目を新設し、1年次の社会未来探究【星城プロデュース！】【学ぼうSDGs】をテーマに活動している写真・コメントをアップする。 ≪HPに年10回以上アップする≫ ○中学校へ訪問し明德コースリーフレットを配付して、取り組みを周知する。6月、愛知県下の中3生全員に明德コースリーフレットを配付し、明德コースの活動を周知する。 ≪重点校174校の中3生全生徒に配付する。≫	◎HPのカテゴリーに『グローバル探究/未来探究/sports knowledge』を新設し、写真・コメントをアップできた。 *明德2年目となるため、世界未来探究の活動をHPにアップして、明德コースの活動を発信する。 ◎明德コースのリーフレットを作成し、6月訪問で訪問校の全中3生に一部ずつ配付することができた。また、説明会・お誘いの会等でも配付し内容を紹介することができた。 各説明会等で参加者のアンケートに探究やプログラム科目に強い関心があり、参加者に届いている感覚を得た。 *次年度はプログラム科目が開始されるため、生徒の感想を加えるなど『探究×プログラム科目』のリーフレットを作成し配付したい。